鷗外全集

第十二巻

鷗外全集

森林太郎著

大正十二年十二月廿二日印刷
大正十二年十二月廿五日發行
大正十三年五月卅一日再版印刷
大正十三年六月五日再版發行

鷗外全集

第十二卷

著作者　森林太郎

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地
和田利彥

發行者　東京市麴町區內幸町一丁目六番地
中塚榮次郎

發行者　東京市牛込區矢來町三番地
佐藤義亮

印刷者　東京市小石川區西江戸川町廿一番地
佐々木俊一

印刷所　東京市小石川區西江戸川町廿一番地
富士印刷株式會社

（非賣品）

發行所　東京市麴町區內幸町一丁目六番地
鷗外全集刊行會
電話銀座七八三番・二一八八番
振替東京六二四八五番

鷗外全集第十二卷目次

森林太郎先生筆蹟（大正五年作漢詩草稿）

寂しき人人（GERHART HAUPTMANN）……一
僧房夢（GERHART HAUPTMANN）……一六四
ハウプトマン……二四二
ゲルハルト・ハウプトマン……二五〇
ハウプトマンの肖像三種（長原止水畫）
ハウプトマンが近作二種……三五五
オヂッセウスの弓……三六五

目次

花束 (HERMANN SUDERMANN) …… 三七〇
ズウデルマンの脚本に就いて…… 四〇八
出發前半時間 (FRANK WEDEKIND) …… 四一〇
デオゲネスの誘惑 (WILHELM SCHMIDT-BONN) …… 四六八
街の子 (WILHELM SCHMIDT-BONN) …… 五〇〇
我君 (WILHELM VON SCHOLZ) …… 五九〇
負けたる人 (WILHELM VON SCHOLZ) …… 六一六
夜の二場 (FRIDA STEENHOF) …… 六五四
飛行機 (EDUARD STUCKEN) …… 六六四
編纂者の詞(小山内薫)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

GERHART HAUPTMANN.

人物

ヲツケラアト。（男）

ヲツケラアト夫人。（姑）

ヨハンネス・ヲツケラアト。（主人）

ケエテ・ヲツケラアト。（妻）

ブラウン。（畫家）

アンナ・マアル。（女學生）

牧師コルリン。（牧師）

レエマン氏。（洗濯女）

乳母

女中

女小間物屋

停車場の人足

この脚本の物語は、ベルリンに近きフリイドリヒスハアゲンなる別莊にての出來事なり。別莊の園は直ちに湖水ミュツゲルゼエに接す。五幕ともその舞臺は同一なり。稍廣き座敷。居間と食堂と。以上中等社會の行き屆き

たる裝飾をなしあり。寫眞及び木版繪の額は近世の學者の肖像を現はす。中には神學者もあり。これにダアヰンとヘツケルと交れり。ピアノの上に油繪あり。儀式の服を著けたる牧師の肖像なり。その他壁上に、シユノル・フオン・カロオルスフエルドの聖書の圖數種を複製せるものを掛く。左手に戸一つ、右手に戸二つあり。左手の戸は主人の書齋に通ず。右手の戸二つは、その一つ寢間に通じ、その一つ廊下に通ず。座敷は可なりの奥行あり。迫持窗二つと後壁の硝子戸とより、エランダ（前房）を見、又園と湖水と、湖水のあなたなるミユツゲル山とを望む。

時代。現代。

第一幕

座敷は空虚なり。書齋に通じたる戸、只寄せ掛けありて、中より說教する牧師の聲聞ゆ。數秒間にしてその聲止み、寺院樂を奏する手風琴の音聞ゆ。樂を奏する事數節にして、戸は全く開かれ、左の人物みな盛裝して登場す。姑。主人の妻ケエテ。襁褓に包みて赤子を抱きたる乳母。

姑。(五十歲ばかりの老夫人。黑き絹の衣服。髮を眞中より左右に分けゐる。よめケエテの手を取りさする。)今のお說教は好く出來たぢやないか。お前さんはさう思はないかい。(よめケエテは二十一歲。中背。ほつそりしたる體。髮黑く、色蒼く性質優しげなり。病後にて、大ぶ回復したる體。强ひて微笑み、器械的に頷き、赤子の方へ行く。)

乳母。好い子の、好い子のお坊つちやん。あい、あい。(抱きたる子を搖り動かす。)もうおねむだと見えますね。こちよ、こちよ、こちよ。おやおや、もうどうしても知らない顏をして入らつしやるわ。(子を窮屈がらせじと西洋襁褓の紐一本ほどく)。これで樂樂しますでせう。坊つちやん好い子だ。ねんねおし。ねんねおし。(口の中にて子守歌を歌ふ。)ほんとにあの牧師樣のお顏を、一しよう懸命見てゐましたことね、こんなお顏で。(眞似をなす。)それは好かつたが、その最中におしつこが出ましたわね。大變な時に出ましたわね。(子守歌。)

「ちやんがおこると鞭で打つ。
そんなに打つては痛ござる。」

寂しき人人

しつこをしておいて、大變な聲をしておむつかりでしたわね。あい、あい。坊つちやん好い子だ。ねんねおし、ねんねおし。(足にて調子を取り、歩む。妻ケエテ笑ふ。その聲は心より笑ふと見ゆれど、神經質なる聲音なり。)

姑。ねえ、お前さん、あれを御覽よ。可哀いぢやないか。この子の睫の長いことね。

乳母。これはお母あ様のお讓りものでございます。坊つちやん好い子だ。ねんねおし。まるで總か何かのやうでございますわね。

姑。ほんに御覽よ。お母あちやんそつくりだよ。(妻ケエテ强くかぶりを振る。)ほんとうだよ。

妻。(つらさうに云ふ。)どうぞ、お母あ様そんな事を仰やらないで下さいまし。わたくしになんぞ似ては困ります。わたくしは似て貰はうなんぞとは思つてゐないのですもの。わたくしになんぞ似ては。(言ひ掛けて跡を言ふ力なく止む。)

姑。(詞を反らす。)ほんとに丈夫な子だことね。

乳母。お相撲さんでございますわ。

姑。まあ。御覽よ。このお手手を。

乳母。それ、あの大きな棒を持つて入らつしやる神様がございますね。あのヘラクレエス様のやうなお手手でございます。(妻ケエテ子に接吻す。)

姑。さうだよ。胸なんぞもしつかりしてゐるぢやないか。

乳母。然様でございますとも、陸軍大將のやうなお胸でございます。こちよ、こちよ。大きくおなりになると、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

五人力位おありなさいませう。

姑。まあ、婆あやが。(姑とよめと笑ふ。)

乳母　なんと云つても血がお宜しいのでございますからね。こちよ、こちよ。赤ちやんといふものは、血で生きて入らつしやるのでございます。こちよ、こちよ。(歌ふやうに。)どりや、どりやあちらへ參りましよ。赤ちやんのお部屋へ參りましよ、こちよ、こちよ。坊つちやん好い子だ。ねんねおし。(寢間へ退場。)

姑。(乳母の入りたる跡の戸を鎖し、よめの方へ振り向き、可笑しいといふ樣子にて首を振る。)まあ。なんといふ婆あやでせう。でもしつかりしてゐますね。あんなのに雇ひあてたのは、全くお前さんのお爲合せだね。

妻。陸軍大將だと申しましたつけね。(笑ふ。その笑聲痙攣的になり、遂には笑ふか泣くか分からぬやうになる。)

姑。(驚く。)まあ、まあ。どうおしのだい。(妻ケエテ自ら抑ふ。姑よめを抱く。)しつかりおしよ。

妻。いいえ、どうも致したのではございません。どうぞ御心配なさらないで下さいまし。

姑。どうもしないものかね。また神經が惡いのだよ。それも無理はありません、まだほんとうに直つたのではないのだからね。さあここへ來て少し横になつてお出で。

妻。お母あ樣。もうなんともございません。

姑。まあ好いから横におなりといへば。

妻。いいえ。どうぞさう仰やらないで下さいまし。それにもう直ぐに御膳を上げなくては。

姑。(葡萄酒とケエクとを載せある卓に歩み寄り、コツプに葡萄酒を注ぐ。)せめてこれでもお上がりよ。一口お上

がりよ。甘いのだから。(よめ飲む。)これを飲むと氣分がしつかりするでせう。好い子だから、無理をしないやうにしておくれ。只も少しの間用心してさへゐれば好いのだからね。何も心配なんぞをしなくても好いのだよ。今に御覽。あの赤ちやんが出來て見れば、何もかも今までと違つて、工合がよくなるに極まつてゐるからね。倅も氣が落ち著くに違ひないからね。

妻。さうだと好いのでございますけれど。

姑。あの赤ちやんの生れた時の喜びやうを御覽。一體倅は元から子供好きなのだからね。安心して見てお出で。世間はさうしたものだよ。夫婦の仲といふものは、子供がなくては駄目さ。子の無い夫婦は夫婦ではないと云つても好い位だよ。だからお前さん達二人の間に赤さんが出來るやうにと、わたしはどんなに祈つてゐたでせう。わたし共だつてさうだつたよ。夫婦になつて四年の間といふものは、何がなんだか分からなかつたのだよ。そのうち神様がわたし共の願をお聞き屆け下すつて、あのヨハンネスが生れたのさ。それからやつと生活らしい生活に入つたと云つても好いのだよ。これから三月も立つて御覽。あの赤ちやんがどんなにか可哀くなるだらう。もうこの世に足らない事はないといふものさ。可哀い子がある。夫がある。その夫が大切にしてくれる。さうなれば、なんの心配もないぢやないか。

妻。ほんとにあなたの仰やる通りかも知れません。わたくしが苦勞性で、しなくても好い心配を致すのかも知れませんわね。

姑。だがね。惡くお思ひでないよ。お前さんのその心配のなくなるには。(間。)わたしなんぞは、何か心配な事が

あると、一しよう懸命になつてお祈りをするのだよ。天にいます父にお祈りをするのだよ。さうすると胸がさつぱりしてしまひます。それは學者は色色な事を言ひますよ。でも神様はたしかにお出でなさるのだからね。わたしは惡い事は言ひません。男だつて信仰のないのは好い事ではない。女でゐて、信仰がなかつた日にはそれは大變だからね。惡くお思ひでないよ。さあもうこれで好い。餘計な事は言ひません。わたしは毎日その事を神様に願つてゐます。神様はきつとわたしの願を聞いて下さるからね。お前さん達夫婦は善人なのだから、神様が信仰をお授けなさるに違ひない。(姑よめに接吻す。寺院樂止む。)まあ飛んだお饒舌りをしましたね。

妻。ほんとにわたくしの體が早く好くなつて、なんでも出來るやうになれば好いと思ひますの。あなたのさうして色色御心配なすつて入らつしやるのを見てゐるのが、わたくしはつらうございます。

姑。(廊下に通ずる戸口にて。)なんのわたしに氣兼なんぞをするに及ぶものかね。今頃はこの内には用事なんぞはありやしないぢやないか。今にお前さんが達者になると、わたしはぢつとしてゐて世話をして貰ひます。

(姑退場。妻ケエテ寢間に入らんとして、未だ入らざるとき、洗禮を行ひし部屋より畫家ブラウン登場。ブラウンは二十六歳。顏蒼く、疲れたる表情あり。眼の緣に暈あり。生え始めたる八字髭。頭髮を殆坊主になるまで短く刈り込みゐる。今様の衣服、上品なれども汚れいたみたりともいふべき風なり。この人粘液質にて常に不平あり。故に機嫌惡し。)

畫家。やれ、やれ。(立ち留まりて、卷莨入より紙卷一本を取出す。)責苦もやつと濟んだといふものだ。

妻。それ御覽なさいまし。案じるよりは生むが易かつたでせう。

畫家。(紙卷に火を附けつつ。)でも内にゐて繪をかいてゐた方が好かつたのですよ。あんな大氣焰を聞かせられては、しまひには耳が我慢をしなくなりますからね。

妻。それはお爲事をなさる時間が無駄になつたかも知れませんけれど、それはいつでも埋合せが付きますわ。

畫家。とはいふものの、どうせ繪かきなんといふものは、みんな怠けものでさあ。(卓に寄りて腰を掛く。)兎に角洗禮なんといふものは隨分大事ですね。

妻。あなた宅の様子を見て入らつしやつて。

畫家。(急に。)見てゐましたとも。ひどく苛苛してゐましたね。今に何か言ひ出しはしないかと思つて、氣が氣ではなかつたのですよ。惡くすると、牧師が演說をしてゐる最中に、何か言ひ出し兼ねない様子でしたからね。無理もありませんよ。隨分箆坊な事を聞かせられたのですから。

妻。まあ、そんな事を。

畫家。箆坊には相違ありませんからね。(間。)いや。なに、わたしだつてけふのお儀式に出て來たのを、不平に思つてもゐませんよ。事に依つたら、いつかあんなところを一つかいて見ようかと思ふのです。大した圖になりますぜ。

妻。ほんとうにかいて見る氣がおありなさいますの。

畫家。わたしがかけば、その繪から、かう昔懷しいとでもいふやうな空氣が、人に迫つて來るやうにかくのですね。まあ、言つて見れば白葡萄酒と、ケエクスと、嗅莨と、古風な、黃櫨の實から拵へた蠟燭の火との一しよ

になつたやうな空氣を出して見せるのですね。見てゐる人が好い心持になつて、うつとりするやうにかきまさあ。

（主人ヨハンネス・ラツケラアト洪禮の部屋より登場。二十八歳。中肉中背。髪と髭は明色。才智有りげなる面持。顏に絶間なき表情の變化を見る。全身の運動極めて不安なり。一點の非を打つべきところなき著附け。燕尾服。白の領飾。手袋。○主人溜息を衝き、手袋を脱ぐ。）

ふん。演說に感服して、牧師先生に降服したかな。

主人。さうさね。降服したとも申し兼ねるて。（妻に。）おい。食事はどうだな。

妻。（心配らしく。）あのあちらのエランダの方にいたしましては。

主人。なんだつて。あの外のところへ食卓を拵へたのかい。

妻。（躊躇する樣子。）あそこでは惡かつたのでせうか。あのわたくしは。

主人。おい。なんだつてそんなにびくびくしたやうな物の言ひやうをするのだい。己は食ひ付きはしない。（間。）溜らないなあ。

妻。（止むを得ず、決心したるらしき調子。）あのわたくしが、ついエランダにいたしましたの。

主人。そんならそれで好いよ。（間。）何も己はエランダが惡いと云やあしない。まるで己を、人を食ふ野蠻人のやうに思つてゐる。

畫家。（半ば口の内にて。）そんなに小言を言ふなよ。

主人。（妻を掻き抱き、優しく。）ほんとうに己が悪かつた。併しいつでも己が何かいふと、まるで暴君の命令をでも聞くやうな風をするから悪いのだ。己がオツトオ第何世とかいふやうな、淒い奴でもありはすまいし。悪い癖だ。

妻。でもわたくしのする事がどうかするとあなたにお氣に入らないのですもの。

主人。（又語氣劇しくなる。）好いぢやないか。偶には氣に入らなくつたつて、何もびくびくする事はない。自分の理窟を言へば好いのだ。己に抗抵して見れば好いのだ。己だつて己の性分をどうにもする事は出來ない。お前の方で無暗にへこんでしまふから悪い。己にはその厭に忍耐して、マドンナ臭い樣子をするのが、何よりも氣に食はないのだ。

妻。又そんな事で氣を悪くなすつては困りますわ。なんでもない事なんですから。

主人。（慌しく。）なんだと。なんの己が氣を悪くするものかい。飛んでもない事だ 大間違ひだ。（間）どうかすると直ぐに氣を悪くするのなんのといふのだから、己には不思議でならない。（畫家何をか言はんとす。）君までさう思ふのかい。そんなら、それで好い。己はみんなに屈服するのだ。それで好い。何か外の話にしようぢやないか。ああ。やれ、やれ。

畫家。なんにしろ君のやうにさう苦情たらたらでは溜らないではないか。

主人。（胸を抑へ顏を蹙む。）ああ。

畫家。どうしたといふのだい。

主人。どうもしない。やつぱりいつものだ。かう胸がちくりとして。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com